

## 竹内まりやの「人生の扉」に想う

～ 金婚の節目に ～

後藤 忠

春がまた来るたび ひとつ年を重ね  
目に映る景色も 少しずつ変わるよ  
陽気にはしゃいでいた 幼い日は遠く  
気がつけば五十路を 越えた私がいる  
信じられない速さで 時は過ぎ去ると  
知ってしまったら  
どんな小さなことも 覚えていたいと  
心が言ったよ

I say it's fun to 20  
You say it's great to be 30  
And they say it's lovely to be 40  
But I feel it's nice to be 50

満開の桜や 色づく山の紅葉を  
この先いつたい何度 見ることになるだ  
ろう  
ひとつひとつ 人生の扉を開けては  
感じるその重さ  
ひとりひとり 愛する人たちのために  
生きていきたいよ

I say it's fine to be 60  
You say it's alright to be 70  
And they say still good to be 80  
But I'll maybe live over 90

君のデニムの青が 褪せていくほど  
味わい増すように  
長い旅路の果てに 輝く何かは 誰にで  
もあるさ

I say it's sad to get weak  
You say it's hard to get older  
And they say that life has no meaning  
But I still believe it's worth living

お陰様で私どもはこのたび(2023/03/26)金婚を迎えることができ、前日に子どもらが祝いの席を設けてくれた。その席で普段はあまり歌いたがらない妻が、珍しく自分から歌いたいと言って歌ったのがこの歌である。

結婚 50 年、波瀾万丈の人生。いろいろなことがあった。その間、家族が人生の節目で迎えるごく平凡な通過儀礼(イニシエーション)は大事にしてきた(つもりである)。お正月、誕生日、節句、七五三、入学式、卒業式、成人式、就職、結婚式などの節目節目を、大袈裟にならない程度に「来し方を振り返り、今を見つめ、明日を想う」脚下照顧の機会にしてきた。

しかし、金婚は誰もが迎えられるイニシエーションではない、むしろ希なことと言えよう。

師は結婚 49 年目に奥様を亡くされ、親友は 51 歳の若さでこの世を去った。だから本当に**有り難い**ことなのである。

好むと好まざるとに関わらず、人生は難題を次々と我が身に突きつけてきた。そうした人生からの問いかけと愚直に対峙し、もがきつつ、何とか今に至れたことは真に奇跡であり、感無量と言う他はない。しかも、その問いかけが厳しいものであればある程、むしろそれは得難い貴重な体験となって自己の内面に強い「芯」を形成してきたことも実感している。

年を重ねるごとに人生は麗しく、美しさを増していく。

たどたどしく歌う妻の「人生の扉」は、まさに金婚の節目にふさわしく、聞きながらしみじみと過去を振り返り、まだ見ぬ明日を想うひとときになった。